編者はしがき

本巻第14巻と次巻第15巻は、「神想観」について記されている。「神想観」とは、谷口雅春先生が啓示によって普及させた瞑想法であり、観法であり、「祈り」の一形式である。谷口雅春先生は、本書「はしがき」で、この「神想観」について次のように述べておられる。

「静的工夫によって、あたかも潜水夫が海の底ふかく沈んで貴い真珠を採取して帰るように、深く人間の〝実相〟に沈潜して、人間の貴い内部にある〝実相〟――すなわち本来円満完全にして無限知・無限愛・無限力量なるものを現実にまで獲得してこなければならない理由があるのである。その静的工夫こそが本篇において説かれている観行である」

また、谷口雅春先生は折に触れて、この「神想観」について説明されている。

「吾々の生命の親様を専念専思することによって大生命に帰一し、この身このままで大生命と一体となり、弘法大師が『即身成仏』と言われたような円融無碍の境地となり、一挙手一投足がキリスト教で言うところの『みこころにかなう状態』になり、日本古神道で言うところの惟神の生活が出来るようになりたいというのが、わが『神想観』であります」(本書第一章「心の根本的調律法」)

「(神想観とは)一種の坐禅観法だと思っても宜しいのです。一種の坐禅観法ですけれども、それに〝祈り〟というものが一緒になったような、〝坐禅〟と〝観法〟と〝祈り〟とが一つに融合した万教帰一的な瞑想の方法であります」(『幸福生活への招待20章』)

「神想観は一つの祈りでありますが、今なきものを下さいという祈りではないのであります。既に与えられているものを確認する息宣であります。だから神想観で健康を祈り

求むる際には、単に健康を祈り求めてはならないのであります。健康を常に祈り求めるということは、自己の健康ならざることを自己自身に信ぜしむるに到るのであります。人間は神の子である。それ故、人間は常に健康であるので今更健康を求める必要はないのであります。唯先ず神の子である自分は今現に健康を有つと信じ、実相の意識に入り、実相の完全さこそ本当のものであること、神がすべてのすべてであること、されば自己は神と分ちがたく一つであることを全心情をもって知り、自己の欲する全てが既に与えられている事実を、深く魂の奥底より肯定すれば好いのであります」(本書第四章「無限供給に汲む道」)

「如何にすれば、人類が自己解放を遂ぐべき真理を自覚し得るであろうか。釈尊は、六波羅密すなわち、布施、持戒、忍辱、精進、禅定、般若の六つの到彼岸の道を示された。神想観というのは、私が修行中に神授せられたる般若の智慧を禅定によって到達せる道である」(『詳説　神想観』「はしがき」)

「精神統一」の手段ならほかにもある、『神想観』は必ずしも精神が統一しなくともよいのです。精神統一するに越したことはないが、招神歌で神を招ぶのですから、精神が統一しなくともただあの形式どおりおやりになれば神徳が得られるのです」(頭注版『生命の實相』第十五巻)

本書の中には、神想観の形式ややり方、また、「招神歌」の称え事が詳しく説明されているが、各宗教、各宗派にもそれぞれの「祈り」や「瞑想」があり、その形式や方法も色々である。しかし、その説くところの真理の深さの程度によって、その効果の深さ浅さも千差万別である。「神想観」は、「人間は神の子であり、神と神の造り給えるもののみが実在し、現象は一切無し」との谷口雅春先生の説かれる大真理に裏打ちされた、真理を自得するための実践であり、この「神想観」の実践によって無数の奇蹟と真理の獲得と幸福とが現出しているのである。

この「神想観」が初めてこの世に登場したのは、昭和五年六月一日発行の『生長の家』誌の中の「生長の家経済観」においてであった。『生長の家』誌の創刊から四号目であった。

「生活に必要なものは必ず神が誰かの手を通して我々のところへ持ってきて下さる。それが理論ではなく、実際に分かってくる境地に達するにはどうしたらよいかと申しますと、生長の家では神想観と言いまして神との一体感を深める修行を致します」

昭和五年と言えば、世界恐慌の影響が日本にも及び、日本全体が経済的に危機的な状況に陥っていた時代である。その中で、谷口雅春先生は「神想観」の実修を通して、神との一体感を深めるとともに、現実の世に「無限の富」を現出させる道を説かれたのである。本篇下巻(第15巻)第五章「無限供給を受ける道」にそのことが詳述されている。

谷口雅春先生は、『生命の實相』自伝篇に述べられている如く、長く真剣な求道の果てに、遂に神の声を聴き、「真の神」を発見した。そしてその神の声を聴いた直後の感動的な光景が次のように記されている。

「わたしの眼の前に輝く日の出の時のような光が燦爛と満ち漲った。何者か声の主が天空に白く立っているように思われたが、それはハッキリ見えなかった。しばらくすると

その燦爛たる光は消えてしまった。わたしはポッカリ眼をひらくと、合掌したまま坐っている自分をそこに見出したのであった」

これが、谷口雅春先生のお悟りの瞬間であり、「神想観」の原型に他ならない。

「神想観」とは「神を想い観る」ことである。本全集「実相篇」「生命篇」「聖霊篇」等で諄々と説かれ続けられた「真理」が、「生活篇」で行動化され、実生活化され、そして本篇で、静的な観行によって信念化されるのである。

本篇を通して、「真理」の知的理解が進み、さらに「真理」が生活化され、信念化され、より深い「真理」の体得に進まれることを念願して止まない。

平成二十七年五月吉日

谷口雅春著作編纂委員会